広東国民政府における政治抗争と蔣介石の抬頭

北村　稔

【要約】一九二四年一月の第一次国共合作のあと、国民党は二五年の七月一日に広州に国民政府を樹立した。しかし二五年の三月に孫文が北京で死去していたため、指導権争いが発生する。この争いは廖仲愷の暗殺事件を機に急展開をとげ、蔣介石の率いる軍事力にもとづき胡漢民や許崇智らの対立分子の一掃が行われ、蔣介石、汪精衛、ボロディンからなる新指導部が成立した。つづいて国民政府は蔣介石を総司令として宿敵の陳炯明を打破し、広東全省を統一して体制を強化した。しかし共産党員の勢力伸長をめぐって国共の対立がたかまった結果、蔣介石は中山艦事件により共産党員をおさえこみ、親共的な汪精衛を逐いおとして独裁的権力を手中にした。そして懸案の北伐準備を開始した。親ソ勢力による中国の統一を最優先の外交政策とするソ連は、蔣介石の共産党員抑圧を黙認し、北伐の遂行を援助する。このあと国民革命の舞台は広東をはなれ、全国的規模での新展開が出現する。

史林　六八巻六号　一九八五年十一月

はじめに

一九二四年一月に国民党と共産党は「国民革命」の遂行を目的として、広東省の広州で第一次「合作」を成立させた。筆者はこれまで本誌上に、「第一次国共合作時期の広東省農民運動」（58巻6号）、「第一次国共合作の成立について」（63巻3号）、「第一次国共合作の展開について」（66巻4号）の三稿を発表し、国共合作の研究史をはじめ、国共両党間の政治理論上の差異、国共合作と農民運動、労働運動、国内政治、外交問題との関係など、第一次国共合作時期の研究をすすめてきた。本稿では、従来の研究で詳しくとりあげられることのなかった広東国民政府内での諸勢力の抗争の実態を解明し、

あわせて蔣介石の抬頭する経過をあきらかにした。とくに、これまで蔣介石による反共クーデターとして位置づけられるのみで、真相がいまひとつ明らかではなかった「中山艦事件」とその後の政治展開について紙面の半ばを費し、新出の資料と規出の資料を再検討することにより、「事件」の性格を明らかにした。

一　財政統一および整軍の進展と国民政府の発展

1

国民党は内部の癌であった楊希閔と劉震環を粛清し、一九二五年の七月一日には旧来の大元帥府を廃止して国民政府を樹立した。二四年一月の国民党一全大会では、孫文のいう「以党治国」を実現するため、国民党の直接の指導下におかれる国民政府樹立の必要が決議されていた。[1] したがって国民政府の成立は国民革命遂行の第一段階の達成であったが、たちまち新しい内部抗争が発生する。

これよりさき孫文は国民会議の開催を唱えて広州から北上し、二四年の十二月末には北京に入ったが、翌年の三月二一日には持病の肝臓ガンのため逝去していた。[2] 孫文の死後、国民党は終身総裁(党首)として絶対的権限を附与されていた孫文の地位[3]は空席のままとし、孫文の遺言である「遺嘱[4]」を党是とし中央執行委員会を最高機関として進んでいくことを決定した。しかし孫文という党権力の中心が失われたことにより、党内抗争がまきおこる。

争いは国民政府主席の人選問題からはじまる。国民政府の最高機関は16名の政府委員で構成されたが、主席には孫文の北上中に大元帥代理をつとめた胡漢民が有力視された。しかし胡漢民は広東省内の土着勢力との利権上の癒着や、楊希閔と劉震環の粛清に際して調停的態度をとったことなどから、他の政府委員の反感をかっていた。[5] 国民党の顧問として孫文の亡きあと以前にまして権威を増大させていたボロディンも、時として共産党に批判的な態度を示す胡[6]漢民を支持せず、

孫文の側近として同じように古い党歴を誇る親共的な汪精衛を支持した。他の政府委員たちにとっても、胡漢民にくらべて権力欲が少なく個人的な敵を持たない[7]汪精衛が主席に就任するほうが好ましかった。こうして汪精衛が主席に選出され、胡漢民は外交部長という外国語のできない彼にとっては事実上の閑職についただけであった。この事態は胡漢民の権威により利権を維持しようとした広東省内の土着勢力の不満をまねいた。胡漢民の従弟の胡毅生らは文華堂というクラブをつくって不満分子を糾合し、日刊の「国民新聞」を発行して汪精衛、廖仲愷、蔣介石らの国民政府の中心的人物たちに対し、共産党に接近して国民政府を壟断しているという中傷をくわえはじめた。[8]

政府主席の人選問題に端を発した国民政府内の争いは財政統一と結びつき、さらにはこれと不可分の関係にあった整軍すなわち軍隊の統一をめぐる争いへと発展する。ソ連軍事顧問団の一員であったチェレパノフによれば、国民政府の成立後も、省内各地に駐防する軍隊はできるだけ独立した勢力を維持しようとし、駐防地域における財政権を返還しようとはしなかった。[9]国民政府の財政責任者であった廖仲愷は従来から財政統一の急先鋒であり、国民政府の成立を機に省内の財政機関を財政部の管理下におこうと腐心していた。彼が最初に着手したのはその後の経過からみて、これまで雲南軍や広西軍に占拠されていた広州市内の財源の回収であった。廖仲愷は黄埔軍官学校の党代表でもあり、その財政統一政策は蔣介石の率いる黄埔軍官学校の軍事力を核とする整軍と表裏一体をなしていた。それゆえに蔣介石も財政統一を強く主張した。国民政府成立直後の七月三日には、汪精衛を委員長に蔣介石をはじめ各軍の司令官で構成される軍事委員会が成立したが、蔣介石は七月七日に「革命六大計画」を提出し、その「第三項」で軍事委員会による軍需統一の必要を述べ、各軍に対して七月十五日を期限に占拠中の財政機関を国民政府に返還するよう求めた。[10]財政統一の最大の障害となったのは広東軍であった。広東軍は省内の土着勢力と結びついており、以前から楊希閔のひきいる雲南軍につぐ軍事力と財政収入を有し、鉄道収入や阿片税、酒税、賭博税、公娼税などの税収をめぐり雲南軍と対立していた。[11]そして雲南軍の粛清後はこれらの財源をとりもどし、省内での支配権を強化しようとしていた。広東軍の士官たちは第一次東征の成功による蔣介石

の威信抬頭に強い不満をもっており、[12] 胡毅生の組織した文華堂に加入する者もでた。広東軍がとりもどそうとしていた財源には胡毅生らはもとより、呉鉄城らの国民党の要人も利害関係をもっていた。[13] したがって廖仲愷の財政統一政策は多方面からの反撥をまねいており、その反撥が暗殺にまで発展する。

八月二〇日の朝、廖仲愷は国民党中央執行委員会のある恵州会館に夫人の何香凝と車で到着した。そして車から歩きだしたとたんに、会館の中に潜んでいた6～7名の男たちが駆けよってきてピストルを発射した。廖仲愷は3ヶ所を射たれて病院に運ばれたが、ほとんど即死であった。たまたま同行していた監察委員の陳秋霜も重傷を負って翌日には死亡するが、何香凝は無事であった。犯人たちは逃げさったが、1名は廖仲愷のボディガードに射たれて重傷を負い、病院に収容されたあとほどなく死亡した。[14]

廖仲愷暗殺の真相は結局のところ謎である。彼が進めようとした財政統一は、要するに他人から権力の基盤を奪いとることであり、誰に殺されてもおかしくない状況にいたといえる。何香凝がのちになってチェレパノフに語ったという話は、事件の奥深い背景を暗示しており興味ぶかい。それによると暗殺の謀議に直接は加わらなかったものの、警衛軍の司令官で広州市の警察局長でもあった呉鉄城も暗殺を支持していた。その結果、通常は恵州会館の玄関に配備されている警察官が事件当日には居なかったという。[15] 呉鉄城は国民党広州市党部の中央執行委員であり、孫文の長子の孫科を中心に太子派とよばれる派閥を形成し、元老派とよばれた汪精衛や廖仲愷さらには胡漢民たちと対抗していた。[16] チェレパノフの伝える話は、廖仲愷暗殺事件の背景に国民党内の複雑な利権がらみの派閥抗争があったことを示している。

当時広州では、共産党の指導により二五年の六月から香港に対する広東人労働者のゼネラルストライキいわゆる省港大罷工が開始されていた。廖仲愷は国民党側を代表してストライキを積極的に支援した。このことから廖仲愷の暗殺は香港のイギリス勢力の仕業であるという見方が当時からあった。[17] しかしこれは国民党内の派閥抗争の熾烈さを見おとすとともに、省港大罷工と廖仲愷の関係を誤って理解する皮相な見方である。イギリス側からみれば、共産党員に対して大きな影

響力をもち、共産党員のようなかたくな反英思想の持主でない国民党員の廖仲愷は、交渉の為の貴重なパイプであった。廖仲愷は商団事件のさいにも外交団とのパイプ役を果した人物である。[18] したがって彼を暗殺したりしてもストライキの火勢に油を注ぐだけで、何の得にもならないことはよくわかっていたはずである。

2

国民革命勢力強化の実質的な推進者であった廖仲愷が暗殺されたことは、国民政府の基礎がためを頓挫させるかにみえた。しかしこの暗殺事件により、財政および軍政の統一はかえって一挙に推進される。そのさい大きな力を発揮したのはボロディンの政治力と、蔣介石の率いる黄埔軍官学校の軍事力であった。

事件当日の午後二時、政治委員会が召集され対応策が協議された。その結果、ボロディンを顧問とし汪精衛、蔣介石、許崇智の三名により軍事と警察の全権を掌握する特別委員会が組織され、ただちに広州市内に戒厳令が公布されて犯人逮捕の活動がはじまる。調査の結果、病院で死亡した犯人のもっていたピストルは文華堂のメンバーである朱卓文のものであると判明した。その結果、胡毅生をはじめとして文華堂に加っていた梁鴻楷らの広東軍第一師の将校たちにも暗殺の嫌疑がかかった。ところが特別委員会はただちに行動に移れなかった。ボロディン、許崇智、蔣介石のあいだで意見が対立したからである。ボロディンは廖仲愷の暗殺事件を機会に、国民党内の反共派を一掃しようとした。廖仲愷の容共的態度が反共派の批判をまねいていた事実を、強引に暗殺に結びつけようとしたのである。そして胡毅生との関係から容疑のかかった胡漢民はもとより、容疑を確定できない鄧沢如、謝持、鄒魯らの逮捕を提案したという。しかしこれには蔣介石と許崇智が反対し、実現しなかった。[19]

一方、蔣介石はボロディンの主張する反共派の一斉逮捕には反対したが、事件を機会にして文華堂に加っていた広東軍の将校たちを粛清することには積極的であった。これには当然ボロディンも同意したと考えられる。整軍と財政統一が一

挙に促進されるからである。蔣介石は早くから、広東軍内への自らの影響力増大に努力していた。その結果、広東軍中の最強部隊といわれた第二師第三旅を率いる李済琛や、当時は広東省の南西地域（南路とよばれた）にあって鄧本殷と対峙していた陳銘枢らの広東軍将校は蔣介石を支持するようになっていた。[20] したがって梁鴻楷らの粛清にはさしたる困難はなかったと思われる。李済深はこのあと蔣介石とともに梁鴻楷らの部隊を武装解除する原動力となり、広東軍の部隊を改編した国民革命軍第四軍の軍長に任命される。陳銘枢も国民政府内での蔣介石の権力確立に尽力する。

ところが広東軍内の粛清を実行するには、許崇智が問題となった。彼は広東軍の軍長であり、梁鴻楷らの粛清は自らの勢力基盤を損うことであった。チェレパノフによれば、許崇智は特別委員会の席上で「梁鴻楷は反革命の役割を演じたかもしれぬが、永いあいだの友人であり手出しはできない」と述べたという。しかし許崇智は広東軍全体に及ぶ強い統率力をもっていたわけではない。梁鴻楷は直属の部下ではなかったし、李済琛や陳銘枢にもみはなされていた。その結果いきおい発言にも重みを欠き、結局はボロディンと蔣介石に梁鴻楷らの逮捕を承諾させられる。[21]

ところで汪精衛が特別委員会でどのような態度をとったのかは、いずれの資料にも定かでない。この事実は彼が決定的な発言を行わなかったことを物語っており、汪精衛の調停者的性格と決定的時点での決断力の欠如を示している。財政統一と整軍の必要は認めながらも、討議が紛糾しすぎないように適当な発言をくり返していたのであろう。

特別委員会の行動を躊躇させていた理由はほかにもあった。ピストルという物的証拠が充分な朱卓文は別にして、文華堂に加ったという理由だけで胡毅生や梁鴻楷らを逮捕し、さらには胡漢民までをも暗殺関係者とするには無理があった。ところが八月二三日に李福林が特別委員会に出頭し、胡毅生が軍隊の反乱を煽動したこと、ならびに文華堂に参加していた林直勉が日ごろから廖仲愷は殺さなければならないと語っていたという告発を行った。この告発は内容といい、タイミングといい、仕組まれたものであろう。李福林は孫科を中心とする太子派のメンバーである。太子派が自分たちと廖仲愷暗殺との関係を払拭し、同時に広東軍系の勢力をつぶす目的でおこなったと考えられる。李福林の告発をうけた特別委員

会は翌八月二四日に胡毅生、朱卓文、林直勉に対し逮捕令を発するとともに、二五日には胡漢民をも拘束した。さらに二五日夜半から二六日にかけて、国民政府に敵対しようとしたという罪名で梁鴻楷をはじめとする広東軍将校を逮捕した。[22] 同時に黄埔軍官学校の教導団と李済琛の部隊を出動させ、梁らの率いていた広東軍部隊を武装解除した。このあとただちに軍事委員会が召集され、旧来の各軍の名称をあらためて蔣介石の黄埔軍官学校教導団を国民革命軍第一軍とし、以下、譚延闓の湖南軍を第二軍、朱培徳の雲南軍を第三軍、李済琛の率いる第四軍、李福林の福軍を第五軍として軍事委員会の統率下におくことが決定された。[23] このようにして特別委員会による廖仲愷暗殺事件の処理はひとまず終了した。

つぎにおこなわれたのは、ボロディンが目の仇にしていた林森や鄒魯らの反共派と拘束中の胡漢民に対する処分であった。ボロディンが反共派の排除に固執した結果といえよう。彼らの処分にさいしては汪精衛が積極的な役割をはたしている。すでに勝敗は決せられており、優位に立った側からの一方的な事後処理であったことや、自らの権威を確立するために有利であるなどの理由が考えられる。まず九月七日の政治会議で、林森と鄒魯を北京政府との間で外交問題を交渉する代表団の主席および秘書として、北京に派遣することが決定された。これは体のよい追放であった。両人が北京に向け出発したあと、九月十五日の中央執行委員会では汪精衛の提案により両人の代表権はとり消され、両人にかわる中央執行委員会常務委員として共産党員の林祖涵と譚平山が就任することになる。[24] さらにこのあと黄季陸らの反共派もつぎつぎに広州から排除され、[25] 国民党内で共産党員が大量進出する素地ができあがった。一方、九月十五日の政治委員会は胡漢民を外交使節の名目でソ連に送ることを議決したが、その面目を救うため外遊は廖仲愷暗殺以前に決定されていたこととされた。[26] 胡漢民は九月二二日に黄埔からソ連船でウラジオストックに送られる。胡漢民は国民党の元老であり、元来は容共政策の支持者であった。したがって林森や鄒魯のように放逐してしまうわけにはいかず、保護監察処分に付されたのである。

最後に残ったのは許崇智の処分である。梁鴻楷らの広東軍部隊が武装解除されたあとも、許崇智は依然として国民政府の軍政部長であり、広東省々長でもあった。[27] そして改編をまぬがれた旧広東軍の部隊を配下に温存し、財政監督として軍

費を独占して一万五千の兵力を有していた。[28] したがって、このあと行われる陳炯明に対する第二次東征も、当初は許崇智が総指揮に任命されていたという。[29] これは蔣介石を中心とする軍政統一の大きな障害であった。蔣介石は軍事委員会の席上で許崇智が財政を壟断しようとしたと非難する一方、李済琛や陳銘枢はもとより、許崇智の直系の部下であった譚曙卿をも味方につけて許崇智の追放を準備した。[30] かくして九月二〇日には許崇智はすべての職務を解任され、同時に配下の部隊も武装解除されたあと、陳銘枢に護送され上海に追いやられる。[31]

この間、財政統一と軍政統一の具体的措置が進行していた。九月一日には財政統一のための監督委員会が成立し、財政関係部門の統一が開始された。そして許崇智の追放と同時に彼の配下であった広東省財政庁長の李鴻基および軍事局長の閑道職が解任され、宋子文が国民政府財政部長兼広東省財政庁長に就任する。[32] また主として旧広東軍を編入することにより蔣介石の率いる国民革命軍第一軍の拡充と整備がおこなわれ、第一軍は名実ともに国民革命軍の中核となる。[33]

3

内部の結束を固めた国民政府のつぎの課題は、陳炯明をはじめとする広東省内の敵対勢力を消滅させ、広東省全域に支配権を確立することであった。チェレパノフによれば、国民政府をとりまいていた当時の軍事的状況はつぎのようであった。陳炯明は第一次東征軍が楊希閔と劉震環の反乱を鎮圧するためにひきあげたあと、休戦協定を破って勢力圏を拡大させ二五年の九月末には再び東江一帯を占領した。また北方の段祺瑞から陳炯明に援軍として4隻の砲艦が差しむけられ、兵員を満載して広州付近の水域に出没していた。さらにまた、二四年の国民党第一次全国代表大会で中央執行委員に選出されながらも帰鄒があやふやであった四川軍閥の熊克武が、貴州から湖南への移動途中の八月に、突如として広東省北部の北江一帯を占拠した。そして内部争いのおこなわれる広州を観望して勢力拡大の機を窺っていた。省内の南西部（南路）には陳炯明の同盟者である鄧本殷が勢力を維持していた。四方からの敵対勢力の包囲に対し、国民政府は第二および第三

軍により熊克武を監視し、鄧本殷には第四軍の陳銘枢を対峙させ、広州防衛部隊には第五軍をあて、残りの兵力をもって主力敵の陳炯明を攻撃することを決定した。[34] そして九月二八日には蔣介石が軍事委員会により東征総指揮に任命された。[35] 七ヶ月前におこなわれた第一次東征では楊希閔が総指揮であり、蔣介石は黄埔軍官学校の教導団を率いたとはいえ、許崇智の広東軍の一部として参加したにすぎなかった。今回の蔣介石の総指揮への就任は、彼の権力の抬頭を如実に物語る。

陳炯明に対する第二回目の攻撃である第二次東征は、十月一日から開始される。第二次東征開始二日後の十月三日、熊克武が陳炯明と通じた罪で逮捕され、北方からの脅威はとりのぞかれた。第二次東征軍は第一次東征と同様に、北路、中路、南路の三方面にわかれて進んだ。北路は程潜の第六軍、中路は李済琛の第四軍が担当し、主力である蔣介石の第一軍および呉鉄城の警衛軍が南路を担当した。各軍にはソ連の軍事顧問が従軍したが、主席軍事顧問のブリュッヘルが広州を去ったあとは蔣介石の権威が高まり、作戦は主として蔣介石により決定されたという。[36] 東征軍は十月十三日には難攻不落を誇った恵州城を攻略して進撃をつづけた。そして十月二九日から三十日にかけ、第一軍を中心にして退却中の敵の主力を省東北部の河婆付近でとらえ、捕虜４０００人をかぞえる大勝利をおさめた。この一戦により大勢は決せられ、十一月七日に蔣介石は陳炯明の本拠地であった汕頭に入城した。[37] 第二次東征では第一次東征時のような、農民軍による敵軍の後方攪乱や情報の提供などの国民革命軍への協力はほとんどみられなかった。[38] 勝利は純然たる軍事力の差によりもたらされた。

東部戦線での勝利が確定した十一月一日、国民政府は第三軍の朱培徳を総指揮として、膠着状態にあった南西部の鄧本殷にたいして総攻撃を開始した。攻撃部隊は第四軍の陳銘枢の部隊を先鋒として進撃し、十一月二三日には鄧本殷を海南島に逐いおとした。[39] かくして二五年の十二月初めには国民政府の支配は海南島を除く広東省全域に及ぶことになり、翌二六年の二月には海南島も占領される。

① 中国国民党全国代表大会『会議録』二号

② 孫文北上の政治的背景の実態については、前出、拙稿「第一次国共

合作の展開について」を参照されたい。

③ 中央執行委員会決定に対する拒否権や、全国代表大会決定の差し戻し権を与えられていた。

④ 孫文の「遺嘱」成立の過程とその問題点については、堀川哲男「孫文の遺書をめぐって」（京都大学教養部刊『人文』第二十集、一九七三・一〇）に詳しい。なおことあと、「遺嘱」は国民党が会議をひらくさい必ず冒頭で朗読された。

⑤ Tang Lean Li（湯良礼）, The Inner History of The Chinese Revolution, 二〇〇頁。同書によれば、胡漢民の兄（?）の Hu（胡）Ch'ing-Sui が胡漢民を通して広東省の省税を流用し、自分の関係する会社に投資していたという。尚、Hu Ch'ing-Sui については elder brother と記されているが、同書は実際には従弟の胡毅生を younger brother とも記しており、Hu Ch'ing-Sui が胡漢民の実兄か否かは不詳。このほか陳公博によれば、胡漢民は孫文に讒言をしたという理由で、国民政府委員で広東軍総司令であった許崇智にもひどく恨まれていたという。（陳公博『苦笑録』。〔邦訳、岡田酉次訳・松本重治監修『中国国民党秘史』二三頁〕）。

⑥ 包惠僧によると、胡漢民は二五年の夏に黄埔軍官学校で講演を行ったさい、マルクス主義を多方面から批判したという。（『包惠僧回憶録』〔人民出版社・一九八三年〕一八〇―一頁）。包惠僧は中共一全大会に出席し、第一次国共合作中は黄埔軍官学校の政治部で大きな役割を果した。彼は蔣介石をはじめとする国民党の軍官と親しく、その回憶録は当時の実情を知るうえで甚だ貴重である。尚、包惠僧は国共合作破綻後に共産党を離脱したが、中華人民共和国の成立後には国務院に勤務した。

⑦ 汪精衛は蔡元培や呉稚暉、李石曾らと「六無会」を組織し、飲酒の禁、賭博の禁、官職につかないなど、六つの禁を誓いあっていたという（Tang Leang Li, 同前書、二〇六頁）。当時の状況をつたえるいずれの資料も、汪精衛を当たり障りのない人物と記している。

⑧ Tang Leang Li, 同前書、二一一頁。

⑨ А. И. Черепанов, Записки Военного советника В Китае (Москва, 1976), 二七五―六頁。〔チェレパノフ『中国における軍事顧問の手記』〕。尚、同書には抄訳の英語版 AS Military adviser in China, (progress Publishers, Moskow, 1982) と全訳の中国語版『中国国民革命軍的北伐』――一箇駐華軍事顧問的札記――（中国社会科学院近代史研究所翻訳室、北京、一九八一年）がある。

⑩ 毛思誠『民国十五年以前之蔣介石先生』第七編六。

⑪ Черепанов, 同前書、三八頁。

⑫ Tang Leang Li, 同前書、二〇一頁。

⑬ 『包惠僧回憶録』一九六頁。

⑭ Tang Leang Li, 同前書、二一六頁。

⑮ Черепанов, 同前書、二七九―八一頁。チェレパノフは何香凝がこの話をした期日を記録していないが、暗殺事件後に呉鉄城に嫌疑がかかったことはなく、事件直後ではない。チェレパノフは同書の他の場所（四二頁）で、抗日戦争中の一九三八年に再び中国を訪れ呉鉄城に会ったことを記し、「自分はこのときまだ彼が廖仲愷暗殺の一味だとはしらなかった」と述べている。したがって何香凝の談話はこのあとのことであると考えられる。チェレパノフは一九五六年十一月の孫文生誕九十周年記念のさいにも、ソ連側代表団の一員として北京を訪れている（四〇頁）。

⑯ 佐々木到一『ある軍人の自伝』〔中国新書、昭和三八年〕八九頁。佐々木到一は一九二二年八月から二年間、陸軍武官として広州に滞在した。日本陸軍の国民党通として知られ、その著作には『南方革命勢力の実相と其の批判』〔大阪屋号書店、昭和二年〕などがある。尚、

太子派が明確な派閥として成立していたのに比べ、元老派は人物群に対する総称という性格が強く、当時の資料によれば、時に応じて種々の人物に冠せられているようである。

⑰ 中国共産党中央執行委員会「中国共産党為廖仲愷先生遇刺嘱国民党」（『嚮導』一二七期、一九二五年八月三一日）

⑱ 前出、拙稿「第一次国共合作の展開について」参照。

⑲ 李雲漢『従容共到清党』三八二―九頁。

⑳ 陳公博、同前書〔邦訳、三二頁〕。チェレパノフによれば、李済琛はソ連軍事顧問の助言をよく容れ、またたくまに配下の部隊を精鋭化したという。〔チェレパノフ、同前書、三九頁〕。このあたりから、蔣介石との接近がはじまったと考えられる。

㉑ Черепанов, 同前書、二八三―四頁。このあと許崇智は梁鴻楷を宴会にまねき、その席で彼を逮捕する。

㉒ 李雲漢、同前書、三九二頁。

㉓ 毛思誠、同前書〔第七編之六、八月二六日項〕

㉔ 李雲漢、同前書、四一四―五頁。

㉕ 同右、四三五―八頁。

㉖ 同右、三九一頁。

㉗ 劉寿林『辛亥以後十七年職官年表』、二三二頁、四二二頁。

㉘ 毛思誠、同前書〔第七編之七、九月十七日項〕に、『……許軍万五千人。餉九十余万。各軍則多告饑。之一種不平之象。極為可憂』とある。また〔同、九月二〇日項〕に『軍政部長兼粤軍総司令並財政監督許崇智』とある。

㉙ チェレパノフ、同前書、二八八頁。

㉚ 陳公博、同前書、〔邦訳、三二頁〕。

㉛ 毛思誠、同前書〔第七編之七、九月二〇日項〕。包惠僧によれば、蔣介石は許崇智に旅費として二万元を支給し、広東平定後の帰還を保証したという〔包惠僧、同前書、一八六頁〕。

㉜ 毛思誠、同前書〔第七編之七〕。

㉝ 包惠僧、同前書、一八七頁。

㉞ Черепанов, 同前書、二八五―九頁。

㉟ 毛思誠、同前書〔第七編之七〕。同じ日、国民党中央執行委員会は国民革命軍第一軍の各部隊の政治委員を任命したが、第一師党代表の周恩来をはじめ、ほとんどが共産党員であった〔同上〕。

㊱ Черепанов, 同前書、二八九―九〇頁。

㊲ 毛思誠、同前書〔第七編之七〕。

㊳ 前出、拙稿「第一次国共合作時期の広東省農民運動」参照。

㊴ 毛思誠、同前書、〔第七編之七〕

二　国共合作の動揺

1

広東省統一の成功により国民政府の威信は高まり、やがてその支配は隣接する広西省にも及ぶことになる。① しかし一方

では、またもや新しい対立が出現しはじめていた。それは第一章でみた利権や地盤をめぐる争いではなく、国共合作存続の是非を問う政治路線上の争いとなり、国民革命の前途に深刻な影響をおよぼす。

新しい抗争の波紋は、すでに広州の外側でひろがりはじめていた。その反共的態度のゆえに広州を逐われた鄒魯や林森らは、二五年の九月末に上海に到着した。彼らは国民党内での共産党員の進出とボロディンのいいなりになってこれを許している汪精衛に憤懣やるかたなく、国民党上海党部の戴季陶、葉楚傖、邵元冲さらには国民党同志クラブの謝持らとのあいだで対策を協議した。その結果、北京で別途に中央執行委員会をひらき、汪精衛を中心とする広州の中央執行委員会の権限を否定することになった。そしてまず準備のために謝持が北京に赴いた。北京を本拠地とする国民党同志クラブのメムバーに連絡をつけるためである。一方、鄒魯と林森は九江や武漢を訪れ国民党員のあいだを遊説したあと、十月十四日には北京に到着した。しかし北京で中央執行委員会を開催しようという企ては、共産党員が有勢を占める国民党北京党部の抵抗にあい[2]、更には当の国民党員のあいだでも共産党に対する方針が一致せずに難行する。国民党上海党部の戴季陶や葉楚傖らは元来は容共政策の支持者であり、国民党の主導権を認めるかぎり共産党員の国民革命への協力を肯定していた[3]。当時北京にいた国民党の元老であり監察委員であった呉稚暉なども、決して一方的な反共行動をなすべきではなく李大釗らとも協議すべしという考えを表明していた。容共政策は孫文の「遺嘱」にかかわることであり、慎重に処理すべきは当然であった。しかし国共合作の成立当初から容共政策に反対していた国民党同志クラブのメムバーたちは、より明確な反共行動を主張した。その結果、十一月十九日には国民党同志クラブのメムバーが戴季陶と彼に同行していた沈定一を口論の末に殴打する事件が発生し、戴季陶と沈定一はただちに北京を去った。しかし結局は十一月二三日から林森の召集により、孫文の棺のある北京西郊の碧雲寺で国民党中央執行委員会全体会議が開催され、翌年の一月四日まで延べ十九日にわたる会議がひらかれた。これがいわゆる西山会議である。会議では、共産党員の国民党籍の取り消しが決議されたが、最終日に発表された「宣言」では国民革命の遂行において共産党を友党視するとも述べられており、国民党同志クラ

ブ側が戴季陶らの主張に一定の妥協をしたことがわかる。[4] 張国燾によれば、この妥協は陳独秀、蔡和森、張国燾らの中共中央が、西山会議開催前に葉楚傖、孫科、邵元冲らの国民党員と会談し、国共合作の継続を確認しあった結果であった。葉楚傖らは西山会議に関係していたが、共産党からは中間派と目されていた。[5] このような上海の共産党中央の中間派獲得という方針は、ボロディンを含む広州の共産党員たちが目ざした国民党左派とのみ協力するという方針とは、くいちがうものであった。このほか西山会議では、政治委員会の取り消し、ボロディンの解雇、中央執行委員会の上海への移駐、汪精衛の弾劾など十項目が決議され、やがて鄒魯や謝持を中心にあたらしい執行部が上海に成立する。[6] しかし西山会議開催前の混乱に象徴されるように、あたらしい執行部は結束を欠き具体的な政治行動に移れるだけの勢力基盤はなかった。

国民党内から共産党員を排除せよと主張し新しい執行部を作ろうとする西山会議の開催は、広州の国民党執行部への重大な挑戦であった。しかし広州の国民党員たちは、この事態に真向うからの反撃を加えなかった。国民党員の多くは、共産党員の大幅な進出を必ずしも快よくは思っていなかったからである。[7] 広州では二六年一月に、西山会議に対抗する形で国民党第二次全国代表大会が開催されたが、共産党員たちは西山会議の関係者にたいする厳罰を主張した。これにたいして国民党側からは国民革命勢力の統一を維持せよという主旨の融和的発言があいつぎ、その結果、関係者への処分は比較的ゆるやかなものにとどまった。[8] 一方、第二次全国代表大会時には反共的人物は大半が広州から排除されており、中央執行委員の五分の一、中央執行委員会常務委員の三分の一、および党の各部門での実質的権限を有する秘書職のすべてに共産党員が選出された。これは汪精衛とボロディンの意向であった。[9] このような共産党員の大幅な進出は広州におけるあらたな対立を表面化させる。そしてその対立は、国民革命勢力発展の要であった黄埔軍官学校の中で醸成されていた。

2

黄埔軍官学校ではボロディンの斡旋で、一九二五年の一月二五日に共産党員の学生による同学会組織として青年軍人連

合会が成立した。[10] 一方、これに対抗する国民党員の学生たちは、三ヶ月後の四月二四日に中山主義学会（のち孫文主義学会と改名。以後、本稿では便宜上、孫文主義学会と呼ぶ）を結成した。[11] この二つの組織の確執がやがて広州内でのあらたな国共対立をひきおこすのである。

青年軍人連合会と孫文主義学会の成立は、国民革命における国共両党の主導権あらそいを象徴していた。国民党の政治原則は、孫文の三民主義に依拠して国民諸階層を連合させ、帝国主義と軍閥に対抗することであった。これに対し共産党は、労働者と農民を基礎にして階級闘争を発動させ、帝国主義と軍閥に対抗しようとした。すでに前稿でみたように国共合作の成立当初から、階級闘争理論を基礎とする共産主義と三民主義とくにその中の民生主義との理論上の矛盾が問題となっていた。孫文は二四年一月の国民党第一次全国代表大会の演説で「民生主義は共産主義を包括する」と述べ、両党間の指導理念の矛盾を自らの個人的権威のもとに包みこんだ。ところが半年後の八月におこなった「民生主義講演」では、孫文は共産主義の階級闘争理論を否定した。しかしそのご間もなく孫文は死去したため、結局この問題はあいまいなまま残されていた。[12] 孫文という国共合作の要を失ったあと、この問題に結論を下すことは、国共両党のいずれが国民革命で指導的立場にたつのかについての大きな鍵であった。そしてこの問題に国民党側を代表して正面から取り組んだのが戴季陶であり、孫文主義学会は戴季陶の主張に賛同して結成されたものであった。

戴季陶は二四年一月の国民党第一次全国代表大会のあと中央執行委員会常務委員、宣伝部長および黄埔軍官学校政治部主任をつとめていたが、二四年の六月二八日には共産党員との対立から広州を離れ上海の国民党部に去った。[13] しかし二五年の三月に孫文が死去したあと四月下旬には広州にもどり、五月十八日からひらかれた国民党第三次中央執行委員会全体会議に出席し、孫文の「遺嘱」を奉じることを宣言する「接受総理遺嘱文」を作成していた。[14] この前後に、かれは北京や広州で「孫文主義の哲学基礎」と題する講演をさかんにおこない、国内の各階級の連合による国民革命の達成こそが孫文思想の根本である民生哲学（主義）の実現であると主張し、共産党員のめざしている階級闘争にもとづく社会革命を否定

した。また、誠・仁・勇・知などの儒教の倫理徳目を革命実践の重要な精神的要素であると主張した。[15] 昨今の研究では戴季陶は反共主義者のレッテルを貼られるだけで、その主張が詳しく検討されることはない。毛沢東の「新民主主義論」に依拠した三民主義解釈が優勢を占めているからである。[16] 戴季陶が儒教徳目を強調したことも彼の主張が否定的にとらえられる要因となっている。しかしその著作を素直に読めばわかるように、戴季陶の主張は孫文の「民生主義講演」を基礎としており、決して彼の独創ではない。また容共政策の支持者であったことや西山会議に際する態度からも明らかなように、戴季陶の立場は一概に共産党員を国民党内から排除しようというものではなく、共産党員が国民党の指導をうけいれるかぎり国民革命への協力を承認していた。このような立場は、国共合作に際しての国民党側の原則を確認するものであった。[17] したがって孫文なきあと、容共政策を継続しつつも主導権を確保しようとしていた国民党員にとっては、ボロディンや共産党員への憚りから両手を挙げて賛同するわけにはいかぬとしても、戴季陶の主張は内心では歓迎すべきものであったといえよう。孫文主義学会の成立を推進した黄埔軍官学校の教育長であった王柏齢によれば、黄埔軍官学校の国民党代表である廖仲愷が孫文主義学会の成立を喜んだという。[18] 廖仲愷は容共政策の推進者であり共産党側からは国民党の最左翼と位置づけられていた人物である。したがって意外の感がせぬでもないが、ソ連軍事顧問のチェレパノフも「左派は当初、孫文主義学会を以って共産党に対抗させようとしていた」と述べており、[19] この話は当時の広州の国民党員たちの実情をよく伝えている。孫文主義学会の成立には黄埔軍官学校の校長である蔣介石の承認が必要なことはいうまでもない。したがって彼もまた会の成立に賛同していたと思われる。戴季陶の影響であろうか、孫文主義学会の成立前後から蔣介石の学生に対する訓話には、儒教徳目への言及が目だってふえてくる。もっとも蔣介石はこのあと発生する孫文主義学会と青年軍人連合会の争いに対しては、「民生主義は共産主義を包括する」という国共合作成立時の孫文の定義を遵守し、その調停に努めていた。[20] ソ連軍事顧問団と共産党員が蔣介石の抬頭をささえる大きな柱であったからには当然である。また広東省内の統一が進行しているあいだは国民革命勢力の結束が必要であり、両会の対立も一定以上には激化しなかった。ところが

広東省内が統一され、一方では共産党員が国民党内で大幅に進出する二五年の末頃から両会の対立は一挙に表面化し、孫文主義学会と共産党全体との抗争へと発展する。そして国民革命勢力の軍事力の要となっていた蔣介石がそれまでの調停的態度を捨てさり、共産党員の勢力伸長をはばもうと決意したことにより事態は急激な展開を迎える。

3

蔣介石が第二次東征に成功し汕頭で占領地行政の確立に腐心していた一九二五年の末、広州では孫文主義学会が十二月二九日を期して大規模な成立式典とデモ行進を挙行しようとしていた。式典では西山会議支持、ソ連顧問団に反対する、などが決議される予定であったという。[21] 当時、蔣介石の秘書をつとめていたのは黄埔軍官学校第一期の優等卒業生であり共産党員であった蔣先雲である。また国民革命軍第一軍の政治委員もほとんどが共産党員であった。このほか新しい占領地行政の責任者として東江弁務特弁に共産党員の周恩来が任命されるなど、蔣介石は共産党員を重用していた。したがって十二月二八日の夜に広州の汪精衛から孫文主義学会の企てについての電報をうけとると、蔣介石はただちに広州の孫文主義学会に打電し、成立式典とデモ行進は認めたが、共産党とソ連顧問団への反対決議は禁止させた。[22] 以上の事実から、この時点では蔣介石の中には共産党員とソ連顧問団への不満は生じていなかったといえよう。

蔣介石は汕頭での占領地処理をすませ、二五年の十二月三一日に広州に戻ってきた。そして翌二六年の一月にひらかれた国民党第二次全国代表大会では、中央執行委員会常務委員に選出される。さらに就任を辞退したとはいえ、二月一日には国民革命軍総監に推挙されるなど、第二次東征の成功という功績により蔣介石の国民党内での地位は高まったかにみえる。しかし実際には、わずか二ヶ月の東征中に広州の状況は変化し、軍事指導者としての蔣介石の地位は動揺しはじめていた。

まず第一に、自己の権力基盤である国民革命軍第一軍の内部に問題が生じていた。第一軍は二五年の秋に拡充され、従

来の黄埔軍官学校教導師を発展させた第一師のほかに、広東軍と四川軍の部隊を改編した第二師および第三師が加えられていた。これらの師団のうち第一師は、東征終了後も蔣介石腹心の何応鈞の統率下に汕頭に駐留していた。問題となったのは新編の二つの師団、とくに第二師であった。あらたに第二師の師長となっていた王懋功は元来は許崇智の部下であったが、蔣介石の将来性を買いその傘下に投じた人物である。その結果として王懋功は広州衛戒司令という広州防衛の責任者という重職に任じられており、第二次東征には参加していなかった。ところが王懋功は蔣介石の東征中に、汪精衛やソ連主席軍事顧問のキサンカに接近し、直属の上官である蔣介石の意向を無視するようになっていた。[26] これは蔣介石には一大事であった。国民革命軍の中核である第一軍内の統制が乱れることは、国民革命軍全体に対する蔣介石の統制力が失われることを意味していた。王懋功は共産党員ではなかったが、共産党にはいったと噂されていた。[27] 第二師にも政治委員をはじめとして多くの共産党員がおり、これらのことから蔣介石の中には王懋功への憎しみだけでなく、共産党員に対するわだかまりが生じたと考えられる。

さらにまた、王懋功が接近していたソ連主席軍事顧問のキサンカが蔣介石と対立しはじめた。蔣介石は広東省が統一されたからにはすみやかに北伐を実施すべきと考え、すでに汕頭滞在中から具体的な計画を立案していた。[28] これに対してキサンカは、軍事力の不足や民衆運動の未発展などを理由に北伐の早期実施に反対した。しかし北伐は国民党の規定方針であり、孫文は二四年の六月にソ連主席軍事顧問のパブロフに北伐の早期実施を依頼し、[29] 二四年の十月には失敗に終ったとはいえ北伐が試みられていた。加うるに、蔣介石が北伐の早期実施を主張した背景には、呉佩孚と張作霖の勢力が増大し両派が連合して馮玉祥の国民軍を圧迫しているという北方における状況の変化があり、これにすばやく対処しなければ軍事的に不利をまねくという理由が存在していた。[30] しかもソ連軍事顧問のすべてが北伐の早期実現に批判的であったわけではなく、[31] 二五年の七月に広州を去っていたブリュッヘルなども北伐の成功を楽観していた。[32] したがってキサンカに対して蔣介石が不満を抱くのも無理はなかった。このようなときキサンカと蔣介石の対立を調停すべき立場にあったボロディン

は、二月三日に譚平山を俱い馮玉祥との合作条件を打診するため北方に赴いており、広州には不在であった。[30] 蔣介石は二月十六日には参謀団の改組と政務官の地位にあるロシア人顧問の解雇を主張したが、[31] 狙いはキサンカの排除にあったと思われる。この主張がいれられぬとみるや蔣介石は、キサンカと共謀して党内の混乱を企てたとして王懋功を二月二六日に逮捕し、[32] 腹心の劉峙を第二師の師長に任命した。[33] さらに翌二七日には汪精衛に対し、正式にキサンカの罷免を要求した。[34] ところが汪精衛は何の具体的措置を講じることもできず、徒らに対立を助長させるだけであった。かくして蔣介石は汪精衛に対しても大きな不満を抱くことになった。

このほか黄埔軍官学校の政治教官であった共産党員の高語罕が二六年一月の国民党二全大会開催中に黄埔でおこなった講演で、「黄埔は革命的ではない」と述べ、さらには蔣介石を軍閥になぞらえて「……段祺瑞であれ蔣介石であれ反革命なら打倒すべし」などと口ばしった事実[35]に示されるように、二六年初めの広州の雰囲気は必ずしも蔣介石を東征の英雄として歓迎するものではなかった。これに対し孫文主義学会の会員たちは、共産党員の勢力伸長の危機を蔣介石に訴えるとともに、東征や内部粛清での大きな功績にもかかわらず蔣介石が冷遇されていることを述べたて、彼の疑心暗鬼をかきたてるような謡言をさかんに流していた。これらの謡言には、共産党が暴動を計画しているとか、国民政府が共産化するなどというものまであったという。[36] 以上のような状況下に、いわゆる中山艦事件が勃発する。

① 広西の李宗仁と黄紹竑は従来から親国民党であったが、二六年の一月二六日に広西省境の梧州において両人と国民政府側代表の汪精衛、譚延闓との会談がおこなわれた。このあと広西省側は白崇禧を代表として広東省の桂林で協議がつづけられ、六月一日には黄紹竑が広西省長に就任し、広西省は国民政府の体制下に組みこまれる。

② 李雲漢、同前書、四一五頁。

③ 前出、拙稿『第一次国共合作の成立について』参照。

④ 李雲漢、同前書、四一七―二一頁。このほか西山会議は汪精衛を弾劾したが、蔣介石とは連合が可能であるという立場をとっていた(Tang Leang Li, 同前書、二三〇頁)。しかし、蔣介石は西山会議の開催を遺憾とし、国民党各支部にその旨を告げる通電を発していた(毛思誠、同前書〔第七編八〕、十二月二五日項)。

⑤ 張国燾『我的回憶』第二冊、四六三―四頁。

⑥ 李雲漢、同前書、四三四頁。

⑦ 張国燾、同前書〔第二冊〕、四八一頁。

⑧ 党籍開除は謝持と鄒魯だけであり、他は留党看察処分に付された。

『関於弾劾西山会議審査報告書』、『弾劾西山会議決議案』、〔中国国民党第二次全国代表大会会議録、所収〕）

⑨ 張国燾は、中央執行委員選出予定者名簿を汪精衛から事前に示されたさい、汪精衛が中間派獲得という上海の共産党中央の方針を全く尊重していないことを知ったと述べている。（張国燾、同前書〔第二冊〕三八二―三頁）。

⑩ 陳以沛「黄埔軍校大事記」（一九二四―一九二七）（『第一次国共合作時期的黄埔軍校』所収〔文史資料出版社、一九八四、北京〕）

⑪ 同　右

⑫ 前出、拙稿「第一次国共合作の成立について」参照。

⑬ 羅家倫『国父年譜』（増丁本）下冊、一一〇〇―一頁。

⑭ 李雲漢、同前書、三六四頁、四〇一頁。

⑮ 戴季陶『孫文主義之哲学的基礎』（『戴季陶文存』〔中国革命書店、発行年不明〕所収）。同書は小冊子として出版された。戴季陶は二五年の六月には再び上海に去り戴季陶弁事処をもうけて活動し、『国民革命与中国国民党』を刊行した。（『戴季陶文存』所収）

⑯ 前出、拙稿「第一次国共合作の成立について」参照。

⑰ 張国燾によれば、ボロディン自身も戴季陶の主張が国民党の原則的立場を確認している事実を認め、積極的な反論をしかねていたという（張国燾、同前書、四七〇頁）。共産党側からは陳独秀が機関誌の『嚮導』に「給戴季陶的一封信」を発表し、階級闘争を是認する観点から批判を与えている。（『嚮導』第一二九期、一九二五年、九月）。

⑱ 王柏齢「黄埔創始的回憶」・〔節録〕（広東革命歴史博物館編『黄埔軍校史料』（一九二四―一九二七）、三三六―八頁）（広東人民出版社、一九八二年）

⑲ Черепанов, 同前書、三八二頁。

⑳ 蔣介石は一九二五年十二月五日に完成した『黄埔軍校第三期同学録』に序文を呈したが、その中で「……為三民主義而死。亦即為共産主義而死也……中国革命不能不承認為世界革命中之一部。而実行三民主義則共産主義即在其中矣……」と述べている。（毛思誠、同前書〔第七編之八〕）。

㉑ Черепанов, 同前書、三八一頁。

㉒ 毛思誠、同前書〔第七編之八〕。なお同書には単に、「公漏夜厳電阻止」とのみあるが、Черепанов（同右）により成立式典とデモ行進だけは行われたことがわかる。

㉓ 包惠僧、同前書、一九五―六頁。

㉔ 同右、一九八頁。

㉕ 蔣介石は一九二五年の十二月十五日に、軍事委員会に「改革軍政建議書」を提出し、北伐実行のための六項目からなる軍事力整備案を建議している（毛思誠、同前書〔第七編之八〕）

㉖ Черепанов, 同前書、一三八頁。

㉗ 当時、国民政府と馮玉祥のあいだには協力関係が成立していたが、これに対して二六年の一月五日に馮玉祥攻撃を目的とする張作霖と呉佩孚の同盟が成立した（李剣農『中国近百年政治史』（下）、六七四頁〔台湾商務印書館、民国六七年〕）

㉘ Черепанов, 同前書、三二八―三〇頁。一九二六年の二月初旬に北京において、折りから到着した赤軍政治部主任ブブノフをまじえた会議がおこなわれた。チェレパノフも同席したが、北伐の実施について楽観論と時期尚早論のあったことがわかる。

㉙ "Blücher's "Grand Plan" Of 1926" (The China quarterly, No. 35, 1968) ブリッヘルが北伐計画を論じた文書。原文はロシア語。ソ連の極東研究者として知られるカルトノーヴァの前言によれば、一九二五年の九月に作成されたものという。

㉚ 李雲漢、同前書、四八六頁。

からの辞職を申請し、しかもこれを通電として各地の国民党々部と新聞社あてに打電している。理由は、このまま軍権を握っていては軍閥の轍をふむというものである（毛思誠、同書、第七編七）。したがって、すでにこのころから蔣介石の抬頭を軍閥として批判する動きがあったと考えられる。

㊳ 包恵僧、同右、一九八頁。毛思誠、同右、は種々の謡言の存在を記すが、その内容までは記載していない。

㉛ 毛思誠、同前書（第八編一）。

㉜ 同　右。

㉝ 包恵僧、同前書、二〇二頁。

㉞ 毛思誠、同前書（第八編一）。

㉟ 包恵僧、同前書、二〇三頁。このことは、毛思誠（同右・四月二〇日項）記載の蔣介石の演説からも確認できる。なお、蔣介石は東征中の一九二五年十月十七日に、突如として国民政府に対して第一軍軍長

三　中山艦事件

1

三月二〇日未明、蔣介石は劉峙の率いる国民革命軍第一軍第二師の部隊を動員し、造幣廠あとを司令部として広州市内に戒厳令をしいた。そして海軍の中山艦を命令なく移動させ反乱を企てたとして、共産党員の海軍局長李子竜を自宅で逮捕するとともに中山艦を拘束した。さらに第一軍中の共産党員の政治委員を逮捕するとともに、ソ連軍事顧問団の住居およびストライキ委員会の建物を包囲した。しかし三月二一日の朝には、蔣介石は李子竜をのぞく共産党員を釈放し、ソ連軍事顧問団とストライキ委員会に対する包囲を解く。そして李子竜には容疑は残るとしながらも、自らの独断的行動に対して軍事委員会に処分を請うた。[1] これが中山艦事件であり、発生の日時から三・二〇事件ともよばれるでき事である。

当時この事件は、中山艦の不審な動きを共産党の反乱だと思いこんだ蔣介石が、機先を制すべく行った突発的行動だとみなされた。蔣介石は事件直前まで、種々の謡言に対してひたすら冷静な態度を装っていた。したがって事件の渦中にいた陳公博や包恵僧も、まったくの突発的でき事としてこの事件を記録している。[2] 蔣介石も事件後そのように弁明し、ソ連

と共産党側も、孫文主義学会が策謀により中山艦を移動させ混乱をひきおこそうとした点は認めながらも、蔣介石のとった行動そのものは全くの突発的でき事であったとして事件を処理した。その結果、国民党とソ連の友好関係は維持され、国共合作は継続されたのである。[3]

しかし国共合作が終焉したあとでは、国民党側は共産党が蔣介石を中山艦でソ連へ拉致しクーデターにより国民政府の実権を奪おうとしていたのだと主張し、[4] 共産党側は蔣介石は孫文主義学会の策謀に乗せられて突発的行動をとったのではなく、最初から孫文主義学会と共謀していたのだと主張することになった。[5] 両者の主張のうち、国民党側のいう共産党クーデター未遂説は、当時の状況から考えて成立し難い。クーデターによる権力奪取はコミンテルンとソ連が掲げていた民族統一戦線という国際戦略の否定であり、両者の完全な統制下にあった中国共産党員とソ連顧問団が独走するのは不可能であった。しかし共産党側のいう蔣介石陰謀説も一方的主張にとどまっており、これを論証する過程が欠如している。その結果、問題の焦点は、事件が孫文主義学会の策謀に乗せられた蔣介石の突発行動か、あるいは共産党側のいうように孫文主義学会と蔣介石の共謀によるものかの二点に絞られる。中山艦事件にかんするこれまでの研究もおおむねこの二点をめぐるものであり、これについては波多野善大氏が「中山艦事件について」で紹介している。[6] 波多野氏は、事件そのものは蔣介石のクーデターであるが、孫文主義学会の策謀に乗せられたものであろうという看点に立つ。しかし資料的制約から断定をさけている。ところで本稿でしばしば引用するチェレパノフは、中山艦事件は孫文主義学会をふくむ反共派をまきこんだ蔣介石による周到な計画的行動であり、当初の計画では朱培徳、譚延闓、李済琛、呉鉄城らの参加も見込まれていたと述べ、事件前後の状況とその裏側の動きを詳しく紹介している。[7] チェレパノフの記述は中山艦を移動させた策謀の実体には触れていない。しかし国共合作全体にとって中山艦事件がもっていた基本的な意味を知るためには充分な内容を備えている。筆者（北村）の目的とするのも正にこの点である。ソ連側は表面上はこの事件を蔣介石の誤解による突発事件として処理したが、当然のこととして真相をつかむための最大の努力を払ったと思われる。チェレパノフは事件当時は

北京にいたが、ただちに広州にひき返し事件に関するあらゆる情報をあつめたという。チェレパノフが蔣介石から事件への参画を要請された人物としてあげている譚延闓、朱培徳、呉鉄城らは事件後しだいに蔣介石と対立するようになり、やがては武漢政府に参加する。したがってチェレパノフが彼らから直接にあるいは間接であろうとも、蔣介石にとっては都合の悪いしかも精度の高い情報を得ることは充分に可能であった。ではチェレパノフの「蔣介石計画説」を紹介するとともに、他の資料と照らしあわせて検討してみよう。以下、文中の〔　〕は筆者（北村）による補注である。

チェレパノフによれば、蔣介石はすでに三月九日の時点で第一軍の士官たちと協議し、行動をおこすことを決定した。彼らは事態を楽観視し、行動のさいに発表する趣意書すら用意しており、国民革命軍の第四軍〔軍長は李済琛〕と第五軍〔軍長は譚延闓〕さらには第三軍〔軍長は朱培徳〕の一部も行動に加わるものと期待していた。このあと三月十九日の夜半、行動をおこすに先だち蔣介石は呉鉄城を自宅にまねき参加を要請する。ところが呉鉄城は同意しなかった。しかし蔣介石はただちに戒厳司令部となる造幣廠あとに移り、伍朝枢および古応芬と計画を協議した。〔呉朝枢は国民党中央執行委員兼政治委員会委員で広州市の市長でもあり、外交界の重要人物であった。古応芬は国民党中央監察委員兼政治委員会委員で広東省政府の民政庁長でもあり、省内に隠然たる勢力を有していた。この両人は広州に残っていた反共派の主要人物である。とくに古応芬は民政庁長として農村の地主勢力を支持したため農民運動を進めていた共産党員からは目の仇にされていた。〕[8]。そして翌朝の三月二〇日午前三時に劉峙を使者にたて朱培徳を戒厳司令部にまねき、行動への参加を要請した。しかし朱培徳も蔣介石のさそいを拒否し、そのまま譚延闓にあいに行く。かくして蔣介石は他軍の協力を得られないままに、午前五時に予定の行動を実行に移したのである。

以上の経過を、まず蔣介石の行動を知る基本資料である『民国十五年以前之蔣介石先生』と比較してみる[9]。同書には、事件後に蔣介石が一貫して突発説を主張していたため、三月九日に行動が決定されていたなどという記事は当然のこととして無い。しかしこれを暗示するかのような記事は数多くある。まず二月から三月初旬にかけての記事のほとんどは、蔣

介石が国民政府内で孤立化する自らの境遇をいかにして打開するかに腐心し、独立独行の信念を模索している状況に関するものである。そしてこのような一連の記事につづき、三月七日には「珠村に友を訪れ風流を語る」とあり「、は筆者による。以下同じ。珠村は広州市東方の郊外にある村。」、そこで長時間をすごしている。この友とは誰なのか。いささか気になる書きかたである。このあと三月十九日の項にも「自宅で客とあう」とあり、そのあと士官たちと協議して行動をおこす決定をしている。さらに行動をおこして造幣廠あとの戒厳司令部にいた三月二一日には「終日、友と会う」とある。これらの記事のうち三月十九日と二一日の記事は、名前を特定できないとはいえ、中山艦事件のさい蔣介石が突発的かつ単独で行動したのではなく、客と協議し友と行動をともにしたことを示している。しかもこのように人名を特定せずに友とか客とだけ記すのは『民国十五年以前之蔣介石先生』では異例であり、管見のかぎりこの三例のみである。なぜ名前を伏せたのか。客や友は名前をよく知られている人物であり、名前をあげれば事件が突発的行動であるという蔣介石の弁明がくずれさるからであろう。同書によると、中山艦事件後の三月二二日に、蔣介石は朱培徳、譚延闓、李済琛の三人に対して共産党員を制裁しようと提案したが、このとき彼らがすぐに賛成したのをみて、なぜ事前に反対したものがと嘆いている。蔣介石が事件のさいに三人に行動への参加を要請したが拒否されたことを示しているとともに、この三人は友ではないことも示している。それでは一体この客や友はだれなのか。順序が逆になるが三月二一日の友から考えてみる。

第一に、この「或はこれらの」友は反共的人物であり、権力を有する実力者でなければならない。また戒厳司令部にいたにもかかわらず動員されたのが蔣介石の第一軍第二師だけであることから、友とよばれる人物は配下に軍隊をもたない文官であることがわかる。事件当時の広州にいた人物の中で、反共・実力者・文官といえばすぐに孫科が思いうかぶ。しかしチェレパノフは孫科が中山艦事件後の混乱に乗じて呉鉄城とともに反共クーデターを画策したと述べてはいるが、[10] 中山艦事件と孫科との直接の関係は全く指摘していない。すでにみたように孫科と呉鉄城らは太子派とよばれる派閥を形成して国民党広州市党部を握っていたが、彼らが中山艦事件後に反共行動を画策したらしいことは、後述するように『民国

十五年以前之蔣介石先生』にも記載されている。[11] したがって問題の友が孫科である可能性はうすい。それでは、蔣介石と親しく中山艦事件後に国民党中央執行委員会常務委員会主席に選出されて大きな権力をふるうことになる張静江ではないのかとも考えられよう。しかし『民国十五年以前之蔣介石先生』によると彼は事件後の三月二三日に広州に帰ってきており、[12] この考え方も成立しにくい。加うるに反共的人物の大物は大半が広州から追放されていた。このように考えてくると、問題の友がチェレパノフのいう伍朝枢や古応芬である可能性は甚だ高いといわねばならない。事件のさいに蔣介石が古応芬や伍朝枢と関係をつけていたらしいことは、周恩来がのちになって書いた中山艦事件にかんする短文に「蔣介石的地位更加強固了、……不理〔相手にしない、の意〕古応芬、伍朝枢」とあることからもうかがえるのである。[13]

つぎに三月十九日に、蔣介石が自宅で会った客について考えてみよう。『民国十五年以前之蔣介石先生』の文面からみると、蔣介石は士官たちとのあいだで行動決行の決定をする直前にこの客と会っている。この決行直前に会見していることが、この客を呉鉄城だとみなす大きな鍵となる。すなわち呉鉄城は警察局長であり、他の各軍の部隊が広州の市街地には居なかったのに比べ、[14] 彼の配下の部隊は広州市の警備任務をおびていた。したがって何の連絡もなく兵士を動員すれば相方の衝突が予想され、蔣介石は呉鉄城には是非にも事前に連絡しておく必要があった。最後に、三月七日に蔣介石が会った友を伍朝枢か古応芬だと推定する資料はない。しかし蔣介石は翌三月八日には汪精衛に会い、「革命の実権は外人の手に落ちてはならず、コミンテルン〔中国語原文は第三国際。以下、同じ〕との連絡にも一定の限度を定め、自主の地位を失うべきではない」と痛陳している。[15] これらの事実に、チェレパノフがいう三月九日に行動の決定がなされたということをつけ加えると、三月七日、八日、九日の蔣介石の行動には事件決行に向う一連性がみてとれるではないか。したがって七日の友は単なる友ではなく事件に関係する人物すなわち伍朝枢や古応芬だと考えてもよいのではなかろうか。

ここで一つ疑問が生じる。なぜ中山艦事件に対する蔣介石の弁明に疑惑をまねくような記事が、『民国十五年以前之蔣介石先生』から削除されていないのかということである。後述するように同書には他の資料から考えると明らかに削除さ

れている事実がある。[16] しかしここでとりあげた事例からは、編集者が蔣介石の日記をはじめとする原史料に可能なかぎり忠実であろうとしていることがわかり、はしなくもその史料的価値の高さを示している。[17]

このほか陳公博の回憶をみると、事件の発生した三月二〇日の朝に、譚延闓と朱培徳が蔣介石の親書をたずさえて汪精衛を訪づれている。[18] これは朱培徳が蔣介石に戒厳司令部にまねかれ、その足で譚延闓をたずねたというチェレパノフのことばを裏づける。

以上のように、中山艦事件を蔣介石の計画的行動とするチェレパノフの見解は、他の資料によっても裏うちされるものである。ではなぜソ連側は永いあいだこれを公表しなかったのか。この点についてはつぎのように考えられる。いうまでもなく事件当時は国民党との合作を維持するためである。さらにまた、事件の処理をめぐりトロツキー派との論争が激化したため、[19] 国共合作の終焉後も公表されることはなかった。このあと抗日戦争がはじまった一九三七年以降の十二年間は蔣介石との協力関係が再開されており、[20] なおさら公表されることはなかった。そして一九五〇年代になっても、かつての東方外交の無謬性を維持するために公表されることはなかった。ようやく六十年代にはいって国内および国際状況の変化により、事件はもはや時効となり、真相が日の目をみることになったのである。

2

蔣介石は何を狙って中山艦事件をひきおこしたのであろう。チェレパノフは、他の軍人の協力があったなら蔣介石は一日で戒厳令を解除したりはせず、一挙に共産党やソ連と訣別するつもりであったという判断を示している。[21] しかしこれは事件発生時のチェレパノフの考えではない。チェレパノフが中山艦事件から四十年後に『回憶録』を執筆したさいに、事件とその後の歴史展開とのあいだに整合性を与えようとして示した「ソ連の読者への説明」である。そのさいチェレパノフが、二七年四月の蔣介石による上海での共産党員の粛清と南京政府の樹立を念頭においているのはいうまでもない。実

際には事件当時、蔣介石がソ連や共産党と訣別しようとしているなどとは、他のソ連顧問たちはもとより、チェレパノフ自身も考えなかった。[22] ソ連の援助と共産党員が、蔣介石の権力を支える大きな柱であることは周知の事実であった。しかも蔣介石は北伐という課題を前にしていた。もしこの時点でソ連や共産党員と訣別したならば、孫文の「遺嘱」に背いたという非難をあびるだけでなく、広州における「国民革命勢力」を解体させてしまい、その結果、北伐計画を水泡に帰せしめるのは明らかであった。前稿でみたように国共合作を成立させた大きな要因は、中国国内に親ソ勢力を作ろうとするソ連の外交政策であった。[23] そしてこれは、コミンテルンにより定式化されていた植民地・半植民地における反帝国主義民族統一戦線の結成という戦略と表裏一体をなしており、中国共産党員たちはコミンテルンの決定により国民党に加入したのである。さらに、国共合作を実体的な政治勢力として発展させるための大きな柱が、軍事顧問を派遣して蔣介石を中心とする新しい軍事力を育成することであった。したがってソ連側が蔣介石はソ連と離れて独立できまいと判断していたと同様に、蔣介石もソ連政府やコミンテルンは現時点では自分との協力関係を断絶さすことはできまいと確信していたであろう。これはとりもなおさず、国共合作が継続されることを意味した。中国共産党員たちがたとえ不満を抱こうとも、最終的には彼らがソ連政府とコミンテルンの方針に従うのは言を俟たないことであった。蔣介石は事件後、ソ連に反対しているのではなく、キサンカやロガチョフに反対しているのであると述べる。また共産党員を自らの権力機構の中枢からは排除したが、国民党の指導をうけいれる限り互いに協力することを認める。

以上のような状況をふまえて考えるなら、中山艦事件はクーデターという権力の奪取と政策の急変を伴う事態ではなく、国共合作の軌道修正を狙った蔣介石の示威行為であり、中国流にいえば一種の兵諫であった。すでにみたように広州市内にいた軍隊は蔣介石の第一軍第二師だけであり、その実行にはさしたる困難はなかった。そして彼の読みは見事にあたる。事件後、蔣介石はソ連と共産党（コミンテルン）から大きな譲歩をえる。するとたちまち一時は手を組んだかにみえた反共派を切りすて、国共合作を維持する要としての地位を手にいれることになる。

① 毛思誠、同前書〔第八編一〕三月二三日項。
② 同前書。包惠僧、二一〇頁、陳公博、四三頁。
③ これに関しては、当事者である李子竜の「手記」および中山艦の移動命令に関する事件当日の海軍局関係の記録が現存する（前出、『黄埔軍校史料』所収）。李子竜の「手記」は二七年の前半に彼が書いた「汪主席被迫離職之原因経過與影響」の一部分である（『国共合作清党運動及工農運動文鈔』所収、Isaccs Collection of Hoover Institute, No. 2980, 6482）。
④ 蔣中正（介石）『蘇俄在中国』〔民国四十五年、台北〕四〇頁。
⑤ 胡華主編『中国革命史講義』〔一九六三年、北京〕一三二頁。
⑥ 波多野善大『中国近代軍閥の研究』所収。
⑦ Черепанов, 同前書、三七四—九二頁。
⑧ 張国燾、同前書〔第二冊〕四七三頁。
⑨ 同書〔第八編一〕。
⑩ Черепанов, 同前書、三七八頁。
⑪ 同書〔第八編二〕（一九二六年）四月五日項。
⑫ 同書〔第八編一〕。波多野善大氏も、陳独秀の論説に引用された張静江の手紙にもとづきこれを確認している（波多野・同前書、三七六頁）。
⑬ 周恩来「関於中山艦事件」〔節録〕（前出『黄埔軍校史料』所収）。
⑭ チェレパノフによれば各軍の駐屯地域は、汕頭に第一軍、西江一帯に第三軍、広東省東部に第六軍、広東省南部に第四軍、広州市隣接の朱江デルタ地域に第五軍である（チェレパノフ、同前書、三八三頁）。なお、第二軍は北江一帯に駐屯していたことが陳公博の回憶録によりわかる（陳公博、同前書、四六頁）。
⑮ 毛思誠、同前書〔第八編一〕
⑯ 中山艦事件後の王柏齢や呉鉄城に対する処分は全く記載されていない（本稿、第四章一四三頁参照）。
⑰ 問題の友や客という語は編集者が書きかえたのではなく、最初から蔣介石の日記に記されていたと考えられる。
⑱ 陳公博、同前書、四四—五頁。
⑲ トロツキー「スターリンと中国革命」——事実と文書——（山西英一訳、トロツキー文庫『中国革命論』〔現代思潮社、一九七〇〕所収）。
⑳ ソ連は蔣介石の国民政府とのあいだに、中ソ不可侵条約（一九三七・八）と中ソ友好同盟条約（一九四五・八）を締結した。
㉑ Черепанов, 同前書、三七五—八頁。
㉒ 同右、三六八—九頁。
㉓ 前出、拙稿「第一次国共合作の成立について」参照。

四　蔣介石へゲモニーの確立

1

中山艦事件後の蔣介石の行動は汪精衛を逐いおとすことからはじまる。汪精衛には他の国民政府の要人たちが持ってい

たような、自らが支配する派閥や経済的地盤あるいは自分が育成した軍隊などの個有の権力基盤は存在しなかった。すでにみたように国民政府主席および軍事委員会主席という汪精衛の地位は、他の要人たちが汪精衛の党歴や政治家としての名声などを根拠に、胡漢民にたいするあて馬として選出したものであった。他の要人たちにすれば、実体的な権力基盤をもたずに政治家としての名声のみを有し、常に調停者的役割を演じていた汪精衛のような人物が主席の座についたとしても、自分たちの権力基盤を犯されることはあるまいという安心感があった。比喩的にいえば汪精衛は国民政府の象徴すなわち御輿であり、御輿としてかつがれるには格好の人物であった。そしてこの御輿を支えていた最大の担い手は、国民政府直属の軍事力すなわち蔣介石麾下の国民革命軍第一軍であった。ところが中山艦事件により第一軍が汪精衛の支配に服さぬことがあきらかになると、汪精衛の権威は実体的な後盾を失いたちまち崩れさる。包恵僧によれば、事件当日の汪精衛は見苦しくとり乱すばかりであり何の対応策も構じる様子もなかったというが、[1]無理もない。汪精衛を弁護すべき立場にいた陳公博の『回憶』をみても、汪精衛は国民政府主席および軍事委員会主席という自分の権威が無視されたとして徒らに激昂するのみであったことがわかる。[2]

蔣介石は中山艦事件により汪精衛の権威を否定した。しかし汪精衛に何らかの罪名をかぶせて放逐するのは他の党員の反撥をまねくことになり、不可能であった。それゆえ汪精衛はあくまで自発的に身をひいてくれなければならず、その為には無言の圧力を加える必要があった。蔣介石は表面上は汪精衛と事件を結びつけてはおらず、汪精衛に対してはあくまで恭順のポーズを示していた。[3]しかし中山艦事件直後に蔣介石の腹心の王柏齢は事件の原因を包恵僧に説明し、汪精衛とキサンカが共謀して蔣介石を中山艦に乗せソ連へつれ去ろうとした為だと述べたという。[4]この話はすでにみたような国共合作におけるソ連と蔣介石の関係をふまえて考えれば、真憑性にとぼしいことはいうまでもない。ところが陳公博によると、事件後半年ほどたった北伐の最中に、蔣介石自身も王柏齢のいうのと同様の話を陳公博に語ったという。[5]これらのことから考えると表面上の恭順とは別に、蔣介石も内心では「キサンカ・汪精衛共謀説」が汪精衛につたわり圧力が加わる

ことを期待していたと思われる。

蔣介石は三月二二日の朝、自宅を訪れたソ連領事館の人物に対し、今回の事件はソ連に反対するものではなく個人的な問題からおこった事件であると弁明した。これに対してソ連側は安堵の色をあらわし、個人的問題の原因となったキサンカとロガチョフを帰国させると言明した。[6] 事件後にソ連側は汪精衛には何の対応策も打診しておらず、事態の収拾は汪精衛の頭ごしに蔣介石とソ連側のあいだで進行していた。ソ連が権力の支えを失った汪精衛を見限ったことがわかる。ひきつづいて同日の午後、蔣介石、汪精衛、譚延闓、朱培徳およびソ連側代表を交えて汪精衛の自宅で政治委員会の会議がひらかれ、キサンカの帰国、第一軍第二師からの共産党員の党代表の退出、不軌軍官の取り締り、などが決議された。[7] 会議に同席した陳公博によれば、汪精衛は病気のためベッドに横たわったままであり、汪精衛も蔣介石もほとんど発言せぬままに会議は短時間で終了したという。[8] 実質的な議論がおこなわれなかったことは、この会議が蔣介石とソ連側との事前の合意を承認するだけのものであったことを示している。このあと数日で汪精衛は姿をくらます。ソ連側にも見限られ、他の要人たちの支持も得られぬことがあきらかになったからには、もはや汪精衛の存在理由は失われていた。汪精衛が再び姿をあらわすのは一年後である。そして彼に期待されたのは、北伐開始後に激化した蔣介石と共産党員との対立、さらには蔣介石と他の国民党員との軋轢を調停することであった。[9]

汪精衛の出奔を知った蔣介石は、三月二六日に汪精衛あての手紙をかき、姿を現すよう求めている。さらに譚延闓、朱培徳、李済琛に手紙をおくり、自分は退いて休養をとると述べ、汪精衛が姿をあらわすよう努力してほしいと要請した。[10] しかし蔣介石の態度が、事態を穏便に収拾するための儀礼的ポーズであったことはいうまでもない。蔣介石は、ソ連側がすでに妥協し事態が平穏に処理されようとしている状態で、国民政府の要人たちが自分の退出を承認するなどとは露ほども思っていなかったはずである。はたして同日の深夜に宋子文が要人たちの代表として蔣介石を訪れ、留まるよう要請する。そして蔣介石も当然これをうけいれた。[11] かくして汪精衛の排除と自らの権威確立という、蔣介石による中山艦事件処

理の第一段階は完了した。

自らの権威を確立した蔣介石は、三月二九日には「時局に対する意見書」および「党事を整頓する意見書」の執筆を開始する。さらに三月三〇日には、北伐準備のための意見書執筆にとりかかる。[12] これらの意見書はこのあと四月三日に党中央に対して提出され、ボロディンが四月下旬に広州に帰還したあと、蔣介石とボロディンとのあいだで協議が開始されることになる。

2

つづいて蔣介石がおこなったのは、国共合作継続のさまたげとなる要因をとり除くことであった。すなわち中山艦事件をきっかけに共産党員とソ連顧問団の追放をもくろんでいた反共派をおさえこみ、さらには再び国共対立の火種となるおそれのある孫文主義学会と青年軍人連合会を解散させることである。

チェレパノフによれば、三月二二日の午後六時に孫文主義学会の会員を中心に軍人たちの会合がひらかれ、共産党員とソ連顧問団の排除が決議され、蔣介石に働きかけることが決定されたという。[13] チェレパノフは会合に参加した軍人の名前をあげていないが、その後の展開からみて王柏齢、陳策、欧陽格らが中心であったと考えられる。一方これらのグループとは別に、前述したように国民党広州市党部を握る「太子派」の孫科と呉鉄城らも共産党員の排除を画策していた。『民国十五年以前之蔣介石先生』には、王柏齢らの行動についての記載はない。しかし孫科と呉鉄城らの動きについては記録されている。それによると四月五日に宋子文が蔣介石を訪れ、広州市党部が示威運動を画策しているとの密告のあったことを伝え、これをきいた蔣介石はすぐに呉鉄城に手紙を書いて計画を中止させている。[14] このほかにも四月三日に伍朝枢と古応芬が蔣介石を訪れて香港のイギリス側の意向をつたえ、蔣介石を憤慨させたりしている。[15] したがってこの頃のことであろう、チェレパノフによると蔣介石は朱培徳を訪れ、「自分が反革命でないことを示すためには何でもする」と述べた。

さらに審判庁長の李張章に対しても同様の決意をつたえたうえ、「右派をただちに打倒しなければならず、このために私は孫文主義学会を解散する。同時に青年軍人連合会も解散する。呉鉄城は警備司令を解任されなければならず、かわって貴男が就任してほしい。このようにして我々は右派から実権を奪いとることができる」と述べたという。[16] そしてそのことばどうりに、蔣介石は反共派を排除する。正確な日時は記されていないが包恵僧によれば、中山艦事件後しばらくして王柏齢と陳肇英が免職になり広州を去る。さらに欧陽格と陳筌らも処分をうけ、呉鉄城は逮捕されて虎門要塞に監禁されたという。[17] 国民党の党史家である李雲漢も呉鉄城の回憶録を引用して、ボロディンと蔣介石の協議の結果、五月三〇日には呉鉄城が逮捕され、古応芬と伍朝枢も排除されたと述べている。[18] ところが『民国十五年以前之蔣介石先生』には、一連のでき事に関する直接の記載がない。一見なにげなく書かれた少量の記載から、五月十五日に胡漢民が香港に去り、五月二七日に蔣介石とボロディンが反動派の粛清を協議し、(マヽ) さらに六月二日の記事からは伍朝枢、胡漢民、古応芬らがすでに政治委員会の委員を辞任していることを知るのみである。[19] このとき蔣介石により排除された王柏齢、呉鉄城、伍朝枢、古応芬らはやがて復職し、のちには南京政権の重要人物となる。したがってこの時点で逮捕されたり放逐されたりしていては具合が悪く、この部分の記事は意図的に削除されるか或はあいまいにされていると考えられる。

つぎに青年軍人連合会と孫文主義学会に対する処置をみてみよう。『民国十五年以前之蔣介石先生』によれば、四月十六日に青年軍人連合会は自発的に解散宣言を出している。これをうけて蔣介石は、翌十七日に孫文主義学会の幹部たちと会の解散を協議し、二十日には孫文主義学会も解散宣言を出した。しかしこれらの解散宣言の発表は蔣介石の意向を尊重するというだけの儀礼的行動であり、事実上は両会ともに旧来の会員間の結束を保ち、勢力の発展につとめていた。その結果、五月七日には両会の会員のあいだで乱闘事件がおこっている。[20] このあと七月に、蔣介石を会長とし黄埔軍官学校の在校生・卒業生および学校関係者を会員とする「黄埔同学会」が成立し、両会の会員は同一の組織内に吸収される。[21] しかし事実上の対立はこのあとも解消されることはなかった。

3

蔣介石が中山艦事件の収拾をおこなっているあいだに、ボロディンは北京―ウランバートル―ウラジオストックを経由して四月二九日に広州に帰着した。[23] そしてただちに蔣介石が四月三日に党中央に提出した意見書についての協議がはじまる。協議には国民党側から蔣介石のほかに張静江が参加する。[24] 張静江は呉稚暉や蔡元培とともに国民党の元老であり、二六年一月の二全大会では監察委員に選出されていた。彼は従来は上海に居をかまえていたが、中山艦事件後には活動の舞台を広州に移し、国民党中枢の政策決定に参画する。注意しなければならないのは、張静江が蔣介石にとって同郷（浙江）の大先輩であり、気心の知れた親密なあいだがらであったことである。[25] このころから蔣介石は、張静江をはじめ国民党上海執行部の人間たちを登用しはじめる。中山艦事件により自らの主張を実現するための権威を手にしたとはいえ、その分だけ孤立し党内の反撥をかう立場にたった蔣介石は、気心の知れた人間で自分の回りを固めることにより、明確な派閥を形成しはじめたのである。ところでボロディンと蔣介石側との交渉をつたえる資料は『民国十五年以前之蔣介石先生』以外にはない。それによるとボロディンは蔣介石の意見書のうち、後述する「国共協定事件」の原案である「党事を整頓する意見書」に強い抵抗を示した。[26] しかし蔣介石と妥協するというソ連側の方針は、広州滞在中に中山艦事件に遭遇した赤軍政治部主任のブブノフにより決定されていたことであり、[27] ボロディンと蔣介石の交渉が始った五月初旬にはソ連政府の方針となっていたはずである。北伐論者のブリュッヘルが再び広州に派遣され五月中には到着していることが何よりもそれを物語る。[28] したがってボロディンも一定の抵抗を示したのち、蔣介石の「意見書」に同意する。これらの「意見書」は体裁を改めたが内容には何らの変化のないままに、このあと五月十五日から二二日までひらかれる国民党二期二中全会に提出された。会議の経過と提出された案件は『民国十五年以前之蔣介石先生』によれば以下のとおりである。[29]

二期二中全会は五月十五日午前九時開会。二四名の中央執行委員が出席し、会議の議長には蔣介石が推挙された。まず

はじめに蔣介石、譚延闓、孫科、宋子文、甘乃光、陳公博、林祖涵、伍朝枢らにより、四項目からなる「整理党務事案」が提出され、その内容はつぎのようであった。

(1)中国国民党と共産党の関係を改善する。(2)党内の跨党分子の軌外行動と言論を糾正する。(3)国民党の党綱と党章の統一的権威を保障する。(4)共産党員の国民党内での地位および国民党に加入した意義を明確にする。以上の各点を実行するために国民党と共産党の連席会議を組織する。

これらの提案はみてのとおり、原則を確認するだけの「案件」であり、具体的な措置までは規定していない。より具体的で重大な内容をもっていたのは、ひきつづいて蔣介石が単独で提出した「国共協定事件」であった。内容は以下のとうりである。

(1)共産党はその党員に対し国民党に対する言論を改善するよう訓令すべし。とくに総理と三民主義に対する疑問や批評は許さない。(2)共産党はその党員の名簿を国民党中央執行委員会に提出し、主席がこれを保管する。(3)中央党部の部長は跨党分子でないものに限る。(4)国民党の党籍を有するものは党の許可なくして国民党の名義で党務会議を召集してはならない。(5)国民党の党籍を有するものは最高党部の命令なくしては組織したり行動したりしてはならない。(6)共産党およびコミンテルンからの国民党内にいる共産党員への訓令は、まず連席会議にはかって通過させなければならない。(7)国民党員は脱党手続きが完了するまでは他党に入ってはならない。脱党後に共産党にはいったものは再び復党することはできない。(8)党員が上記の規定に違反したときはただちに党籍をとり消し程度に応じて懲罰を加える。

以上の内容が蔣介石が先に書きあげていた「党事を整頓する意見書」に相当するが、(1)、(6)、(7)などの項目は、孫文在世中の二四年八月に中央全体委員会議で決議されていた「国民党内之共産派問題」および「国民党与世界革命之連絡問題」に含まれていたと考えてよい。[30] この案件が提出され内容が明らかになると、出席している委員たちのあいだからざわめきがもれたという。(2)、(3)、(4)などの項目が衝撃を与えたのでもあろうが、蔣介石がこの案件を単独で提出していることを

考えあわせると、四月三日に党中央に提出されていた蔣介石の意見書は未公開であり、ボロディンとのあいだでおこなわれた協議の内容も外からはうかがい知ることのできないものであったことがわかる。

このあとひきつづいて三つ目の案件として蔣介石、譚平山、譚延闓、伍朝枢、陳公博らにより、中央執行委員会に暫定的に主席をおく案件が提出された。主席の職務権限については何の規定もなされなかったが、その役割は単なる議長ではなく、実質的には中央執行委員会の決定を左右する立場にたつことは、当然の了解事項であった。

第二日めは五月十六日午前十時開会、前日に提出された各案件についての審査がおこなわれた。

第三日めは五月十七日午前九時開会。国民党内での共産党員の地位にかんする二つの案件が通過する。この日、蔣介石はあらためて中央執行委員会に対して中山艦事件への処分を請うた。しかし中央執行委員会は、事件の全貌を公表できないからには罪案は成立しないという事件の複雑な性格を象徴するような判断を示し、蔣介石に対しては今後の党事を指導し国民革命を導くべしという希望を表明して事件の処分に終止符をうつ。[31]

第四日めは五月十八日開催。中央執行委員会に主席を置く案が可決される。

第五日めは五月十九日開催。前日の決定にもとづき、張静江が中央執行委員会主席に選出された。国民党は孫文の死後、孫文の「遺嘱」を最高原則とする合議制の党運営を建前としてきたが、この決定により蔣介石は国民党の中枢を支配できることになった。[32]

第六日めは五月二十日開催。蔣介石が提出した党員の再登記案が可決され、三ヶ月以内に実行されることになった。また張静江、譚延闓、蔣介石、呉稚暉、顧孟余の五名が国共連席会議の国民党側代表に決定した。しかし共産党側は指定された三名の代表を決定できなかった。[33]

第七日めは五月二一日に開催され、北伐の開始に関する案件が通過した。

最終日の五月二二日、監察委員を含む全体会議がひらかれ各案件の通過が正式に決定された。このあと、蔣介石が国民

革命の為に団結しようという演説をおこない、二期二中全会は終了した。

4

蔣介石は二期二中全会で中山艦事件に終止符をうつとともに、国民党内における第一人者の地位を確立した。つづいておこなわれたのは二期二中全会で決定された国民党内の整頓計画の具体化であり、中央部門から着手される。まず五月二五日に、共産党員である組織部長の譚平山、宣伝部長代理の毛沢東、農民部長の林祖涵が辞任した。このあと五月二八日に、蔣介石を組織部長、顧孟余を宣伝部長代理、甘乃光を農民部長、邵元冲を青年部長とする新人事が張静江から提案され、中央執行委員会常務委員会で可決される。さらに六月一日には、同様にして葉楚傖が中央執行委員会秘書長に任命された。[34] 葉楚傖と邵元冲は西山会議に出席した国民党上海執行部のメムバーである。しかし顧孟余と甘乃光は共産党側からは国民党左派に分類されていた人物である。[35] このことから新しい人事が反共的人物ばかりを登用するのではなく、一種のバランス人事としておこなわれたことがわかる。一方、六月十一日には陳果夫が組織部秘書長に就任し、国民党の組織全般にわたる再編に着手する。陳果夫は蔣介石がかつて師事した陳其美の甥であり、張静江と同様に従来は上海に居り、国民党内では表だった役割を演じることはなかった。しかし黄埔軍官学校の設立の際には上海で必要な物資を調達したり兵士を募集するなど、蔣介石の権力の確立を蔭から支えていた人物である。[36] 陳果夫が組織部秘書長という枢要のポストに任命されたことは、蔣介石が派閥を形成しはじめたことを如実に示している。陳果夫はこのあと、南京政府の成立後には陳立夫とともにC・C団とよばれた情宣組織を創設し、蔣介石の耳目としてその権力支配を支えることになる。

国民党内の再編成とともに、北伐への準備も矢つぎばやに進行した。以下、『民国十五年以前之蔣介石先生』により、その経過をみてみよう。まず五月二七日には、第一軍の各部隊から退出した共産党員の政治委員たちを再教育するという名目で「高級訓練班」が開講された。これについては、すでに四月三日付の蔣介石の意見書で言及されていたが、事実上

この措置は体のよい共産党員の隔離であった。しかし訓練班の開講にあたり蔣介石が行った演説からは、蔣介石が共産党員たちの有能さを高く評価しており、たとえ脱党させてでも自分の配下におきたがっていた実情がよくわかる。[37] このあと高級訓練班の共産党員たちの大半は、北伐が開始されたあと湖南の唐生智の軍隊に吸収され、やがては蔣介石に対抗することになる。[38] つづいて五月二九日の午後には蔣介石とブリュッヘルのあいだで三時間以上にわたる協議が行われた。さらにひきつづいて軍事委員会がひらかれ、湖南の唐生智を援護する為の費用として、広西の李宗仁に二〇万元を支給することが決定された。そして六月二日には唐生智の軍隊が第八軍として国民革命軍に編入された。六月三日には蔣介石は馮玉祥に電報をうち、北伐について協議するため広州にくるよう要請する。そして六月四日には中央執行委員会臨時全体会議において「迅行出師北伐案」と「蔣介石国民革命軍総司令案」が通過し、翌六月五日に蔣介石は国民政府により国民革命軍総司令官に任命された。

一方、国民政府は六月五日から宋子文、陳公博、陳友仁を全権代表として、香港のイギリス側と交渉を開始する。[39] 永びいている省港ストライキを解決し、北伐開始後には後方基地となる広東省内の安寧を確保するためである。

以上のように、党組織、軍隊、外交問題に布石を打ったあと、蔣介石は国民革命軍総司令官として、七月から北伐に出発するのである。

① 包惠僧、同前書、二一一頁。
② 陳公博、同前書、四五頁。
③ 蔣介石は事件直後の三月二一日には、病気のため自宅でふせっていた汪精衛を見舞っている（毛思誠、同前書〔第八編一〕）
④ 包惠僧、同前書、二一一頁。
⑤ 陳公博、同前書、五九頁。
⑥ 毛思誠、同前書〔第八編一〕。
⑦ 李雲漢、同前書、四九二頁。
⑧ 陳公博、同前書、四九頁。
⑨ 中山艦事件後、汪精衛はフランスに去ったが、翌二七年の四月一日には、モスクワを経由してウラジオストックからソ連船で上海に帰着する。当時、武漢に拠る国民党員および共産党員と、上海、南京に拠る蔣介石との対立が頂点に達していた。
⑩ 毛思誠、同前書〔第八編一〕。
⑪ 同　右
⑫ 同　右

⑬ Черепанов, 同前書、三七七頁。
⑭ 同書〔第八編二〕
⑮ 同右。このとき両人は、イギリスが省港ストの解除とひきかえに借款を申しでていることを蔣介石に伝えたらしい（同上、四月十四日項）。
⑯ Черепанов, 同前書、三七八—九頁。
⑰ 包惠僧、同前書、二一四頁。
⑱ 李雲漢、同前書、五〇三頁。
⑲ 毛思誠、同前書〔第八巻二〕
⑳ 同　右
㉑ 黄埔同学会簡章〔前出『黄埔軍校史料』三八二—四頁〕。
㉒ Черепанов' 同前書、三六九頁。
㉓ 毛思誠、同前書〔第八編二〕。なお、このとき胡漢民もボロディンと伴に帰着した。
㉔ 同　右
㉕ 張静江は二六年七月九日におこなわれた北伐壮行会の席上で、蔣介石を子供の頃から知っていると述べている（Léon Wieger, Chine Moderne, 第七冊一〇六頁）。
㉖ 毛思誠、同前書〔第八編二〕、五月一四日項。
㉗ Черепанов, 同前書、三九〇—三
㉘ 毛思誠、同前書〔第八編二〕、五月二九日項。
㉙ 同右〔第八編二〕
㉚ 前出、羅家倫『国父年譜』下冊、一一一六—八頁。
㉛ ここに示されるとおり、中山艦事件は国共合作（ソ連との提携）を維持する必要から、全貌はあきらかにされぬままに、うやむやのうちに処理された。蔣介石はすでに四月二十日の演説で、事件の背景の複雑さに言及し、「……真相は私の死後あきらかになるだろう……」と述べている。（毛思誠、同前書〔第八編一〕）。
㉜ 陳公博によると、張静江の主席就任についてはボロディンが他の国民党員に対する説得役に回っている（陳公博、同前書、五四—五頁）。これが蔣介石との妥協にもとづくことはいうまでもない。このあと七月九日には蔣介石自身が主席に就任するが、北伐期間中であり張静江がひきつづき代行した（李雲漢、同前書、五一六頁）。
㉝ 李雲漢、同右、五〇六頁。
㉞ 李雲漢、同右、五一二頁。
㉟ 顧孟余はこのあと、武漢政府で教育部長をつとめるなど、蔣介石と対立することになる。
㊱ 陳果夫「建軍史之一頁」（羅家倫主編『革命文献』第十集、所収）。
㊲ 蔣介石は「……共産党は組織ある団体であり、国民党にこれらの新進の党員の加入がなければ、国民党の革命への機能は失われていたかもしれない」と述べ、さらに「……私がもし共産党員なら、革命勢力の統一の必要から共産党を退出し、純粋の国民党員となる……」と述べている。なお、ここに「　」で示した演説の摘要のうち、最初の部分は『民国十五年以前之蔣介石先生』では削除されており、存萃学社編『蔣総統言論彙編』外録㈠（原名、『蔣校長演講集』）より補った。周恩来によると（前出、「関於中山艦事件」）、当時第一軍第一師には二五〇人以上の共産党員がおり、このうち三九人は中山艦事件後に共産党から離脱した。蔣介石はこのあとも、周恩来をはじめ、蔣先雲、包惠僧らの共産党員を離党させようとして種々の働きかけをしたという（包惠僧、同前書、二三三頁）。
㊳ 包惠僧、同右、二五四頁。
㊴ 毛思誠、同前書〔第八編二〕。

むすびにかえて

広東国民政府は国共合作を軸にして内部の粛清をおし進め、一九二六年初頭には広東全省を統一して国民革命勢力としての内実を確立した。そして懸案の北伐を日程にのぼらせることにより、中国の行方を左右する存在となった。この過程で大きな役割を果したのは、新設の黄埔軍官学校で養成された士官を中核とする国民党直属の軍隊であった。そしてこのあたらしい軍事力を養成しその指揮・統一の要となっていた人物が蔣介石であった。しかも蔣介石は孫文の亡きあと、三民主義への絶対的忠誠を唱えることにより国共両党間の矛盾を調停し、動揺しはじめた国共合作を維持しようとして懸命になっていた。従って彼の存在は国共合作の維持と発展にとって極めて大きな意義を有していた。この事実は、軍事指導者として抬頭した蔣介石に軍閥像を重ねあわせて反撥しはじめた共産党員は別にして、ボロディンをはじめとするソ連顧問団にはよく理解されていたはずである。それゆえにこそソ連側は中山艦事件のあとでさえ、蔣介石は野心家ではあるが右派と左派のあいだに居る中間派であると判断し[1]、共産党員たちを責任ある地位から退出させて蔣介石に大権をゆだね、北伐遂行への要に据えたのである。ソ連側にとっては共産党員の勢力伸長などよりも、親ソ勢力による中国統一が優先したことはいうまでもない。これに類する事実は、第一次大戦後のトルコの国民革命に対するソ連からの援助の過程ですでに発生していた[2]。

わたしは中山艦事件は一種の兵諫であると定義したが、以上の事実から考えるとき、蔣介石の行為は中国近代史上にしばしば出現する兵諫だとみなすのが最も適切であるように思われる。蔣介石評価への新しい一石を投じるつもりで、敢えてこの言葉を使用した次第である。

かくして国民革命の舞台は北伐の開始を機に広東をはなれ、全国的規模でのあらたな展開が出現する。北伐は一九二六年の七月一日に開始され、南京と武漢をめざす二つの方面軍にわかれて進撃した。そして九月には早くも武昌が占領され

るなど、国民革命軍は破竹の勢いを示していた。しかし一方では、中山艦事件後の蔣介石による独裁権確立への強引な行動は、共産党員はもちろん国民党員の中からも反撥をまねいていた。加うるに、北伐の進展は蔣介石が確立しはじめた支配体制を流動化させることになった。その結果、一九二六年末の国民政府の武漢への移転問題を発端に、国民政府の内部には再び政治対立が発生する。やがてこの対立は、唐生智の軍事力を後盾にして武漢を拠点とする共産党員および国民党員の集団と、これに対抗する蔣介石を中心とする国民党員の集団との抗争へと発展し、国民革命は重大な転機をむかえることになる。

① Stepanovs' Report on the March twentieth Coup D'etat, [Wilbur and How, Documents on communism, Nationalism and Soviet advisers in China, 1918-1927《Document 23》(Columbia univ. 1956)]。この報告の作成者ステパノフは、蔣介石の率いる国民革命軍第一軍の軍事顧問であった。

② トルコでは一九二〇年から、ケマル・アクチュルクの率いるトルコ国民党が英・仏・ギリシアの占領軍に対抗して国内の統一運動を開始した。このときソ連はケマルを援助し、トルコの共産党員たちは中国の場合と同様にトルコ国民党に加入した。国内統一が成功するとトルコ国民党は共産党員を弾圧したが、ソ連はトルコをイギリス帝国主義に対する防波堤とみなし、そのごも友好関係を維持した。

（三重大学助教授　　）

Political Struggles in *Guangdong* National Government (広東国民政府) and the Rise of *Jiang Jie-Shi* (蔣介石).

by

Minoru Kitamura

Kuomingtang (国民党) and CCP (中国共産党), raising the banner of national revolution, established a united front in *Guang Zhou* (広州) January 1924. After having purged some antagonistic worlords inside the united front, *Kuomingtang* and CCP formed a national government in July 1925. However, struggles for gaining the leadership of the government were immediately commenced because Dr. *Sun Yat-sen*, the superpowerful leader of the united front, had already died in *Peking* March 1925. In the course of the struggles, *Hu Han-ming* (胡漢民), the most prestigeous and senior *Kuomingtang* member, was purged in connection with the assassination of *Liao Zhong-Kai* (廖仲愷) which happened August 1925 and *Xu Chong-Zhı* (許崇智) who was the head of governmental military depart ment was also dismissed because of his unloyal attitude to the national government. Consequently, new leadership was formed by *Jiang Jie-Shi*, *Wang Jing-Wei* (汪精衛) and the *Kuomingtang's* russian adviser, Borodin. After a while, national government under the new leadership launched a military offensive against *Chen Jiong-ming* (陳炯明), the fatal enemy of *Kuomingtang*, and soon put whole *Guangdong* province (広東省) under *Kuomingtang's* rule. However, another inner struggle was triggered off by *Jiang Jie-Shi*. *Jiang Jie-Shi*, worried about communists growing influence and getting irritated with arrogant attitudes of russian military advisers as well, ditermined to restrain communists and russian advisers. *Jiang Jie-Shi* fulfilled his aim by provoking semi-coup d'etat (中山艦事件) on March the 20th 1926. As the result, communists who were in charge of excutive posts of *Kuomingtang* were forced to resign and *Wang Jing-Wei*, the pro-communists and also pro-russian political leader, was forced to leave as well. Thus, *Jıang Jie-Shi* built up his dictatorship and started making preparations for the Northrn Expedition (北伐) which he had been ardent for. Soviet Russia, since its diplomatic aim

was to have China put under the control of pro-Soviet Russia influence, gave a tacit consent to *Jiang's* anti-communists conduct and agreed to give him the necessary aids for launching the Northern Expedition. Thereafter, the national revolution was going to be rapidly extended out of *Guangdong* province, whereas soon would appear new political struggles within the united front.